語釈 ： インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (62)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後　藤　　寛

言語哲学者で政治アナリストでもある N. Chomsky 氏なら「政治と言語」から目下の米国政治をどう見ているのだろう？などと思うことがある。また、semantics 研究者でかつて San Francisco 州立大の教授・学長を務めたのち共和党上院議員となった日系米人 S. I. Hayakawa 氏(1906-1992)ならどうだったろう？元来が直接民主制政治は古代ギリシャの哲人プラトン(Plato)が著書『国家』で説いた内容に原点がある。プラトンは国の統治者(government rulers)は知見をもつ哲学者であるべきとしたが今後、米国の政治言語論争はどう展開するか？今回も水面下で展開する政治的意味劇場を透かし見てみる。

英文を sentence unit ではなく text unit で見るのである。Basic 修得もしかりで、本連載(48), (57)の冒頭でも言ったが sentence unit でバラバラと散漫に見ているのではなく、いわゆる初歩レベルは別にしても早い段階でこれから脱却するのが要領がよい。

語(words)には言霊（ことだま）も宿っている。本連載の text 文も**耳で読む**「幻聴読み」で pattern recognition practice をするのである。実際に実行しているのは筆者自身であろうと思ってはいる。反復黙読でギリシャのアルキメデス(Archimedes)の “分かった!!” の喜びの有名な叫び声 “Eureka!!” (= “I got it !!”) を想起もしたい。「幻聴読み」の入魂で最適な書はやはり神秘主義象徴言語(mystic symbolic language)の体系である聖書となるが、その神秘性は新約福音 gospel {go (= good) + spel(l) (= power of words)}にも象徴される。なお、聖書といえば *The Bible in Basic English* (BBE) への注目なしに orthological（純正科学的）な体系(system)としての Basic 言語の真の理解はあり得ない。

今回(1)は Trump 大統領が 2020 年の大統領選２期目を意識した text 文、(2)は時間をさらにさかのぼり大統領就任１年後（2018 年）の米国経済に満足している様子の text 文をスペイン語翻訳版とも対照し２言語に通底する frame of reference を見て取りたい。

(1) China, Iran & other foreign countries are looking at the Democrat Candidates and “drooling” over the small prospect that they could be dealing with them in the not too distant future.　They would be able to rip off our beloved USA like never before. With President Trump, NO WAY !　(August 1, 2019)

▲「中国、イラン、さらに他国が（2020 年の大統領選の）民主党の候補者に注目し、近い将来の取引に甘い期待を寄せている。これまでにないほど米国を搾取できると思っているのであろうが、私が大統領である限りそれはできはしない！」という内容である。

太線語 foreign は本連載(31)の⑵で扱ったので確認である。[for (= before) + reign (= rule)]で、原義は「支配・権限が前方に及ぶこと、外部のこと」で Basic 語 **rule, regular, right, rail** と同系で、right, rail には「真っすぐに伸びていること」という語感もある。プラスαBasic 語では *address, royal, rigidity* などと同系であるし、un-Basic 語では, reign, region, correct などが同系となる〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(32)参照〕。

太線語 drooling は「よだれを垂らしている」の意味で [dr]の音声からも何かが流れ出る語感として感知したい。drip と同系。Basic 語によりどころを求めれば、おそらく **drop** ともつながっているだろう。黒海北西部で今日のウクライナの南部オデッサあたりが発祥地である印欧祖語 PIE の morphophoneme（形態音素形）は/DHREU/とされている。

太線語 rip は、これも Basic 語によりどころを求めるとプラスαBasic 語 *bankrupt,*

eruption がある。同系である。音声[rip], [rʌpt]から何かがパッと引き裂かれるような意味が直感できればよい。PIE etymon は/REP/である。rip off は「引き裂く」→「奪い取る」→「盗む」、ripoff は「盗み」の意味である。また rip は rob（盗む）、さらにプラスαBasic 語 *robe*（衣服）とも同系で、元来が剥ぎ取って rob した略奪品のことであった。盗賊のいわゆる追い剥ぎを想起すればよい。さらに un-Basic 語 rape（強姦）、rapid（素早い）、surreptitious（内密の）などとも同系。歴史的に人間だけが身体にまとう衣類は特別な意味をもっていた〔旧約・新約聖書に頻出する金・銀にも値する衣類を含め、このあたりは本会 *Year Book* (2017)、(2020)、(2022) などでの拙論参照〕。

下線語 could, would による英語での subjunctive（叙想法）による mode（叙法）のニュアンスも感じ取りたい。感情移入(empathy)である。

下線語 with「～の場合は」での with の使い方には要注目。かつてラジオ米軍放送 FEN（現 AFN）での音楽番組に ‘American Top 40’ があった。“American Top 40 with Casey Kasem !!” という軽快な響きのもので、日本語「ケイシー・ケイサムのアメリカントップ 40 です」の助詞「の」に相当する英語は with となる。厳密に言えば口蓋帆(palatine velum)が下がり咽頭壁(pharyngeal wall)との間が開いた鼻音化(nasalized)発話によるテンポの速い米軍放送などを介し、特に[l]音と[r]音の響きの違いを常に判別（２分割）しつつ聴取するとよい。ここでは[r]音が Ame**r**ican と、米音での fo**r**ty で２度響く。

FEN といえば本連載(21)で言ったがこういう調子の英語を披露した日本人に学者としてはかつて早稲田大学の五十嵐新次郎氏があった。五十嵐氏は野球ワールドシリーズの実況放送アナウンサー調の英語なども物まねで披露し、その響きは見事にサマになっていて大変感動したものである。氏は当時（1960 年代）“物まねの名人”と評されていた。英語は音響的に日本語を話しているときとは同一人物とは思えないように響くのが fake でない本物調である。この「音色」のことを筆者は voxeme（声素）と命名している。

〔以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01- 05)より ― ２言語対照〕

(2) Our economy is better than it has been in many decades. Businesses are coming back to America like never before. Chrysler, as an example, is leaving Mexico and coming back to the U.S.A. Unemployment is nearing record lows. We are on the right track ! (January 29, 2018)

cf. Nuestra economía es la major en muchas décadas. Los negocios vuelven como nunca antes. Chrysler, por ejemplo, sale de México y vuelve a los EE.UU. El desempleo se acerca a mínimos históricos. ¡ Estamos en el camino correcto ! (29 de enero, 2018)

▲速読でスラスラ読みたい。「わが国の経済は何十年も前より繁栄している、企業はこれまでにない数で米国に戻ってきている、Chrysler 社も Mexico から U.S.A.に戻ってきているし、失業率は最低になりつつあり、まったく順調である！」という内容である。

太線語 decades の dec は「10」の意味であるが、decimal〔少数（の）・10 進法（の）〕、dime（10 セント硬貨）、また December（12 月）も同系語である。December は古代ローマ暦で３月～12 月の 10 ヵ月が１年であったものが、新暦で３月の前に１月と２月が入った。したがって September, October, November, December は元来それぞれ７月、８月、９月、10 月の意味であったが、２ヵ月の繰り上げとなった。

英語に decimate（大虐殺をする）という語もある。これはやはり元は「10」の意味に由来し、古代ローマで軍の反乱者をくじ引きで 10 人に１人ずつを処罰として殺す意味にも使われたことが知られていて興味深い語である。C. K. Ogden 監修の GBED(*The General Basic English Dictionary*)は ‘put to death 1/10th or very great number of ’と定義しているが、今日は decimate は「完全にやっつける」の強い意味で用いられる。

14 世紀のイタリアの詩人 G. Boccaccio（G．ボッカチオ）の短編集 *Decameron*『デカメロン』（十日物語）にも dec を見る。これは 10 人の書き手が毎日 1 話ずつ 10 日間書き、100 話を収めた当時の社会風刺小説として知られる。また、the Decalog(ue)は旧約聖書の Exodus『出エジプト記』に記される「十戒」のことで、預言者 Moses（モーゼ）が Mt. Sinai（シナイ山）で神から授かった戒律である。一般に the Ten Commandments と言うが、これがユダヤ民族の倫理・道徳観を写し取る「鏡」(mirror)とされた。神の法(the Law of God)であるこの十戒に関しては本連載(41)の(1)などでも若干触れた。

他に dozen（ダース）{do (= 2 ; two) + zen (= 10 ; ten)}、cent（= ＄1/10²; セント）、century（世紀）も同系語。また thirteen {thir (= three) + teen (= 10)}, fourteen, fifteen, … nineteen の -teen も「10」の意味をもっている。こういった「10」は元々は人間の両手の指の数が 10 本あることとも関わっていた〔このあたりは EP 本では III, pp.160-169、また同上拙著、第二部、例(20)の解説、さらに指そのものに関しては例(46)参照〕。

最初の下線文 Our economy is better than it has been in many decades.で has been ではなく was なら… than it was many decades ago.となり、in は消える。

現在完了形と現在形が共起する例で筆者が実感をもって確認できたのは 1960 年代初頭に、当時のラスク(Rusk)米国国務長官が日米経済合同委員会後の記者会見で “I haven’t agreed with him for fifteen years, and I don’t agree with him now.” と言うのを聴いたときであった。前半部だけでなく、後半部を付け加えたのである。現在完了形の本来的な意味が垣間見られる例である。そのときの英⇔日の逐次通訳者が在日アメリカ大使館の通訳官 Sen Nishiyama（西山千）氏で、この部分を氏は “15 年間私は彼とは意見が合わず、今も合わないのであります” と通訳した。西山氏は英⇒日より日⇒英への通訳が見事で、実に迫力があった。氏はユタ州の生まれで、まさに米国中西部の GA：General American（標準米語）の響きであった（これの音源は今なお手元にある）。

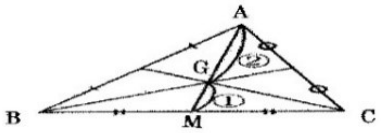
ついでながら、上の tweet の最初の文は戦後の米国経済のことと考え Basic でなら Our [The U.S.] system of producing and distribution of goods and money is better than it has been in the past 70 years.でよいわけで、現在形と現在完了形を対比的に用いる例である。本連載での Trump 氏の特徴ある英文もすべて Basic の範疇で言えると思う。

文中での他の 4 つの下線部 like never before; as an example; nearing record lows; We are on the right track という言い方にも注目しておいてよい。We are on the right track.（われわれはしかるべき軌道に乗っている）は英語的な言い方である。track は初頭子音が[t]であるが PIE の etymon は/DRA/とされ、Basic 語の **drawer, drain, dry, drink, driving, train, attraction** などと同系である。原義は「引っ張ること」で、dry（乾いた）の例でいえば「水が引くこと」を意味する。他に drag（引きずる）、drought（干ばつ）、trace（トレース）など多くの同系語が英語にある〔同上拙著、第二部、例(7)参照〕。

cf. のスペイン語 economía, muchas, décadas, negocios, nunca, antes, desempleo, mínimos, históricos, correcto は、それぞれ英語の economy, **much**, decades, negotiation, **never (< no + ever)**, ante-, unemployment, minimum, **history**, correct と対応し、互いに同系語である（太字体は Basic 語）。英語とスペイン語の対応する paronym（同系語）も発音上で日本人にはスペイン語のほうが断然、呼吸法が楽で正確さがともなう。

上での論点の 1 つとも関わるが(1), (2)のような tweet text 文例に、ある種の線的・直線的(lineal)な流れのようなものが感じられないか？同時に、その流れの中に意味上での重心(center of gravity)と時空間的にそれがバランス(balance)をとり動いていくようなベクトル(vector)が感じられないか？「**意味の重心とそれが動く意味ベクトル**」である。

数学に三角形の重心（G）を求めるものがあるが、3 頂点と対辺の中点を結ぶ線分（中線）は必ず 1 点で交わる〔三角図形そのものもプラトン(Plato)風にはイデアである〕。



上図で頂点 A, B, C と各々の対辺 BC, CA, AB の中点を結ぶ直線を引くとその交点が１つとなり、それがこの三角形の重心（G）となる。そしてたとえば頂点 A とその対辺 BC を結ぶ中線 AM は内分比 AG：GM = 2：1 と必ずなるし、他の２つの頂点 B, C とその対辺 CA, AB の中点を結ぶ中線のそれぞれ内分比もやはり重心 G を軸に 2：1 となる。

これをやや上級の数学ではベクトル的に証明するが、まず位置ベクトル $\vec{P}$(position vector)を定めるのが定石となる。この**位置ベクトル（自分の位置を示す始点）の見定め**はベクトル証明での一種の儀式と言えるが、実はここに言語の場合の「**文での意味的重心・視点**」など論理学上の問題を考える上でのヒントがあると筆者は考えている。C. J. Fillmore 風の Case Grammar（格文法）での locative case（位置格）にも相通する。

言語の諸相を見る上で参考となるのがやはり神の学問たる数学で、特に点(point)・線(line)・面(plane)をもつ図形での幾何学の証明法を英語で思考するとよい。フェイクでない 100% 真で、宇宙(cosmos)の美しい調和感(beautiful harmony)なるものを見ることにもなる。ギリシャ系の語 cosmos（宇宙）からは cosmetics（化粧品）という語も生まれた。さらには花の cosmos（コスモス）も美的調和感をもつとしてこの系列語である。

元来が聖書における神の概念やヘレニズム時代のギリシャ哲学思想を基底にもっている Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* であるが、言語的な真を $True^S$ と $True^E$ (S = Symbolic；E = Emotive)の 2 種に区分けしてもいる〔p.151 など参照〕。

幾何学に projective geometry（射影幾何学）もあり、意味の問題思索でヒントとなる。本連載(59)、(60)、また前回(61)で触れた G. Blocker は *The Meaning of Meaninglessness* (1974)『無意味の意味』で **'projection'（射影）** をキー概念に論旨を展開し、意味の在り方を世界の射影とその解釈と見た。projective semantics（射影意味論）なる分野も新たに考えられてよい。その射影法を見る道具(instrument)としての projector（射影機）を Básic Énglish(Panoptic English)とも見たい。この道具は知覚鏡(perception mirror)ともなろう。G. Blocker 風の人間世界の射影としての「意味」(meaning)とは「X に関し、知覚鏡 Y に映し出される像を、Z と見る解釈」（X→Y→Z）のように理解してよかろう。

幾何学は中世ヨーロッパの大学で 7 つの教養科目(liberal arts)中の 1 つであったことは本連載(47)で確認したが、英語入門期の年齢ですでに学習者はかなりなレベルの数学を取り込んでいる。上記、三角形の重心なども多くの学習者は既知でもあるわけで、英語も他教科との絡みで考えるのが手早く要領がよいし興味も何倍も増すことにもなろう。

ユニークな数学書に『人文的数学のすすめ』（銀林浩・著）がある。何年も前に書店で数学書を見ていて書中に Ogden-Richards に言及する頁があり購入した。英語入門期の年齢で学習者は数学とともに、社会科では世界の政治・経済、倫理社会も勉強している。理科などもかなり学ぶ。英語はよく見かける紙芝居風の naïve（ナイーブ）なものとは別に、意味学を背景に他教科の学習内容とも関わるような取り扱いが考えられてよい。ネイティブ講師による一貫して段階式流れとなる「算数・数学を英語で教える教室」でも開設されるとよかろう。整然とした graded で九九など**四則演算(the four operations)**に始まり①空間(space)関係、②順序(order)関係、③大小(size)関係の３つ(SOS)を見る算数・数学・幾何での中身のある学習が international school 風のものとなる。'brainstorming' で Basic の範疇でも考えるとよかろう。四則演算で数「０」の発見は実に素晴らしかった〔EP 本 III, p.169 参照〕。なお、漢字での「幾何」には how, what の意味を見る。